



ペンゴ

2018年2月1日発行
(毎月1回1日発行)

カトリック谷山教会

891-0113
鹿児島市東谷山2-33-13
TEL 099-268-2084
FAX 099-284-5738

E-Mail: taniyama-cc@lagoon.ocn.ne.jp URL: <http://www5.ocn.ne.jp/~tycc/>

発行人: 頭島 光 神父

編集委員: 太田勇二郎 Sr.下川千穂子 岸城之助

悔い改めて、福音を信じなさい

今月14日(水曜日)から四旬節に入ります。典礼的には、年間の緑色から紫色に変わります。緑は平和、命、人間を象徴する色です。私たち皆が、与えられた命を尊び、平和に暮らすべき存在ですが、悲しくまた愚かでもあります。なぜなら、今でも世界では多くの人々が相争い、紛争は絶えまなく続き、人々の痛みと苦しみは消えるどころか増しているからです。その中で貧しい人々が悲しみに打ちひしがれ、傷つけられています。四旬節の前に、今一度、世界を見渡しなが、私たちキリスト者が為すべきことは何か、深く内省してみたいのです。

◆「神に立ち帰る」

四旬節と言えば、「神に立ち返る」ことが求められます。イエス様も、「回心して福音を信じよ」と私たちに勧めています。回心は、ときに「悔い改めて」とも言われ、一見同じようにも見えます。が、微妙にニュアンスが違います。回心とは向きを変え、方向転換して立ち帰ること。つまり、自分の過ちを認め、悔い改めて、神の福音を信じることです。真の回心を遂げた者とは心から神を信じる者であり、パウロのように180度転回して新しく生き直すことが出来た人のことです。回心は、単に罪を悔い改める人への要求ではなく、善人にも「神に立ち帰る」体験を求めることなのです。

◆「どこにいるのか？」

「あなたが、今居る処はどこですか？」という、この質問に答えるとしたら、あなたはどうか答えますか。神様が、園の木の間に隠れているアダムに同じ問いかけをしました。そのとき、アダムはこう答えます。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。私は裸ですから」と。神の言葉に聞き従うことを忘れ、関心を示さず、掟と知りながら「食べるな」と言われた実を食べてしまったアダム。もはや、この時点で、神の前に隠れることも、弁解することさえできないのです。私たちは、一体神の前にあって何者でしょうか？もう一度、この根源的な問いを自分自身に投げかける必要があるでしょう。



◆「私について来なさい」

イエス様の弟子となった、あのガリラヤの漁師たちを見てください。彼らは、湖で漁をしながら生計を立てる、しがない貧しい人々でした。このように細々と暮らしながらも、いつか必ず救い主が来て下さると信じていました。そこに、イエス様が忽然と現れ、「私について来なさい」と呼びかけられました。彼らは、すぐさまにすべてを捨ててイエス様に従います。その素早さには驚かされますが、それは彼らにとって当然でした。なぜなら、救いはもはや一刻の猶予もない切羽詰まった事柄であったからです。彼らはこのイエス様の呼びかけによって自分たちの生き方を変えられる、それほどの大きな転換

点であり、時宜にかなった福音そのものだったのです。

◆「神の国は近づいた」

イエス様が語るこの衝撃的且つ権威に満ちた言葉は、「神の国」の到来とその実現にありました。これは、イエス様がお一人で為し得ることではなく、弟子たちに委ねて、共に生きることでした。まさに救いとは、神の力だけで完成させられる事柄ではなく、人間の協力のもとに勝ち取るものなのです。神の御子が、人となってこの世界に来られたこと、それ自体が「神の国」の到来であるように、罪ゆえに傷付いた世界を救うためには私たちの宣教協力が必要なのです。

主任司祭 頭島 光 神父

今月の聖人から

聖ユリアナ

2月16日



中世の絵画やステンドグラスで聖ユリアナは、翼のある悪魔と戦っている姿で描かれています。その場面で彼女は獣を縛る鎖を手を持っています。彼女と悪魔との戦いは、中世の教会で好まれた物語の一つでした。

光の天使を装って悪魔は聖ユリアナに現れ、お前が世の中で捨てたものは全て実際には良い物であったと告げます。この悪魔の云い分は正しいように見えました。

聖ユリアナはキリスト信者となって父に背いたので父からは蔑まれ、またエビラシウスというローマの知事の求婚を拒み続けたので、牢獄に投げ込まれました。その中で天使に変装した悪魔と戦って、度々悪魔を縛り床に投げ倒したといわれます。

聖ユリアナは、最初は火焰の中で焼かれ、次に煮えたぎった油の大釜の中に投げ込まれましたが、最後には首をはねられて殉教しました。

Taniyama CC NEWS

睦月寸描

1月1日 成人式：岸誠之助・寛子ご夫妻の長女、優佳さんが目出度く成人式のお祝いを受けられました。



1月1日 車の祝別：神様がお守り下さったお蔭でしょう。これまでに大きな事故は発生していません。今年も気を付けて無事故・無違反で過ごしましょう。



1月7日 七草祝い：可愛い子たちが七草のお祝いです：
上村花実ちゃん、平井佳乃ちゃん、岸真理香ちゃん



1月14日 入門式：只今勉強中のお二人は 平田和美さんと上村良子さんです。4月1日の復活の主日に洗礼を受けられる予定です。





ムイベルガ神父のアンテナ

愛のある所に神様もいます

Ubi caritas et amor; ibi Deus est.

ある知り合いの女性が、「一緒にミャンマーに行きませんか？」と声をかけて下さった時に、私はこのことわざを思い出しました。それから私の心の中ではミャンマー行きに賛成する気持ちがだんだん強くなったため、ドイツにいる私の姉に相談しますと、「ミャンマーにいる難民の方たちを、教会は助けなければいけません。」とアドバイスしてくれ、支援するためのお金を私に送ってくれました。そして今年の1月4日、知人の女性と一緒にミャンマーへ出発しました。まず台湾へ向かい、そこで飛行機の乗り換えが必要だったため、台北空港近くのホテルで一泊しました。翌朝3時に急いで空港に向かい、ミャンマー行きのチャイナエアラインの飛行機に乗りました。鹿児島から台北までの座席スペースは広く快適でしたが、この飛行機内は少し窮屈でした。ですが機内サービスは素晴らしく、また空港では、パーキンソン病の私を車イスに乗せて下さり、長い廊下を楽に渡ることができました。楽をしたのは私だけで、同行の知人の女性は非常に長い廊下を歩き、大変疲れたご様子でした。

空港からミャンマーの首都マンゴンまで6時間かかりました。着いた時は寒くて天候も良くなかったのですが、ホテルでは快適に過ごせました。私が転ばないように、旅行会社の方が車イスを用意して下さいました。また、ホ

テルのスタッフの方々の親切は、私にとって心の薬になりました。ミャンマーに滞在するのは3日間だけでしたから、私たちは少し休んでからすぐに目的地に向かって出発しました。



今回の旅の目的は、2つの児童養護施設の訪問でした。何年か前、2人の僧侶がマンゴン市近くのスラム街を歩いていた時、赤ちゃんの泣き声を聞きました。54歳のウッカウイ僧

は、声の出所を調べに行きました。それはたやすい事ではなく、彼は膝まで浸かるひどい泥道を行かねばなりませんでした。彼はやっとの思いでたどり着くと、びっくりしました。そこ



にいたのは、恐らく2、3日前に生まれたばかりの赤ん坊だったからです。オムツの中には、「また子供を迎えに来ます」と書いた小さな紙切れが入っていました。ウッカウイ僧は、この赤ちゃんを今すぐ自分の家に連れて行かないと死んでしまう、と分かったため、自分の心の声に従い愛の業を行なうことにしました。それ

が、彼の施設「マンキン養護施設(児童養護施設)」の始まりでした。現在、38人の赤ん坊と56人の5~10歳の子供たちがそこに預けられていました。大勢の子供たちの毎日の食事の準備や洋服作り、その他生活のために必要な事を、ウッカウイ僧一人で行なうのは難しかったため、ボランティアスタッフも一緒に働いていました。(以下次号につづく)

この施設には他の援助も必要でした。というのも、梅雨時期になると水が施設の中に上がって来て水浸しになり、その結果、そこにいる子供たちは様々な病気になって、学校に行くことも出来なくなりました。

そういうわけで、ウッカティ僧が橋作りの仕事出来るように、35歳位の若い僧侶が赤ん坊たちの面倒を見ることになりました。彼は、ボランティアの女性と毎日施設の周りの泥道を歩き、捨てられた赤ちゃんを探しています。ボランティアの女性は、この2人の僧侶の活動を支援しています。

次の日、私と知人の女性はミャンゴンにあるカトリック教会の大聖堂に行き、そこで司教様に会いました。皆さんご存知の通り、ミャンマーには現在多くの難民の方々がいて、カリタスは特にこのミャンマーの難民を支援しています。私と知人の女性は、直接難民の方々に会いたかったのですが、今回それはできませんでした。なぜなら、警察と軍隊が外国人の立ち入りを禁止していたからです。その理由の一つは、恐らく難民の滞在地までの道の状態が良くなかったためと思われます。

マンキン養護施設までのひどい泥道のために、すでに私の腰と背中への痛みは最悪の状態でした。正直申しますと、難民キャンプに行けなかった事は、私の健康のためには良かったのかもしれない。

私は、ミャンゴンの司教様に姉からの支援金(5万円以上)をお渡しできました。ミャンマーの教会について少しの間だけ司教様とお話をしたかったのですが、教会と政府の監督者である2人の男性が、私たちからなかなか離れようとしなかったため、司教様も疑われることがないように、私と知人の女性に訪問と支援のお礼として祝福を下さり、明るい声で「それでは、さようなら。」とおっしゃって、急いでその場を立ち去られました。

私は、ミャンマーから谷山教会に戻った後、ある方が「パーキンソン病をお持ちだから、この旅行は大変だったでしょう？」と私を労って下さいました。確かに簡単な旅ではありませんで

した。しかし、カリタスのために働く事ができたことは、私にとり貴重な経験でした。そういう訳で、わたしは再びミャンマーの地を訪れたいと思います。